

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 水野 博太

日本における近代的学知の形成については、近年さまざまな分野で研究が進んでいる。本論文は中国の伝統思想を哲学研究の対象として扱う場の形成過程を、主として東京大学（帝国大学時期を含む）に関係した学者たちの営為に着目して考察したものである。

論文は序章と6つの章、2つの補論、終章、および資料編とから成る。まず序章では本論文の分析対象と検討視角が提示される。前半3つの章では、東京開成学校創設以降、漢学がどのように改変されたかが扱われており、一方ではアカデミズムにおける「支那哲学」・「日本哲学」が島田重礼・井上哲次郎らによって生み出され、他方では「実用支那学」が井上（檜原）陳政によって提起されたことが紹介される。また重野安繹や藤田豊八による漢学改革論についても言及される。後半3つの章では服部宇之吉が「支那哲学」を継承しつつやがて「孔子教」を提唱する経緯が論じられる。特に服部が清国およびドイツに留学した経験に着目し、ドイツでの著作 *Konfucius* (『孔子』) において *Persönlichkeit* (人格) という語を強調したのが当時の日本における西洋哲学受容と軌を一にしていたことに注意を喚起し、ここに後年の「孔子教」論の萌芽を見出している。補論は島田重礼と井上哲次郎の著述の紹介、資料編は井上哲次郎「東洋哲学史」受講生による聴講ノート（金沢大学附属図書館所蔵）の翻字、井上のフランス語論文の和訳、服部のドイツ語著作の和訳、1918年までの東京大学の漢学系卒業生名簿である。

本論文と重なる内容は、以前から少なからぬ研究者が検討・分析している。著者はそれらをふまえ、あえて異なる視角からこの論文を構想した。すなわち先行研究が扱ってきた儒教道徳・漢詩文・京都支那学などの諸問題は外し、担い手たちの論理・思考を内在的に読み解いて「支那哲学」がどう形成されたかを明らかにすることを目的としている。各章でこの方針にもとづいてそれぞれの具体的事象が整理され、「支那」不在の「支那哲学」が当時のナショナリズムの風潮によるだけでなく、外国の学術との相互影響のなかで形成された一面を具えていたことが明らかにされている。

本論文は多くの事象を紹介して相互の関係を整理する作業を主としており、江戸時代からの連続性や東洋哲学以外の諸分野との比較など、なお論述を深める余地を残している。とはいえ学術史研究として十分に優れており、現在にいたる「中国思想史」研究の原像をあぶり出すことに成功している。また「資料」として収録された聴講ノートの翻字や欧文翻訳のように、基礎作業を遂行したうえでそれらを用いて検討・分析を進める手法によって論述に説得力を持たせている。よって審査委員会は博士（文学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断する。